

聊齋志異

卷一

柴田天馬譯

聊齋志異

第一卷

嫦娥之卷

創元社

異 齋 聊
卷 之 娥 婦 第 一

昭和二十六年三月三十日初版發行
昭和二十六年四月三十日再版發行

定價一九〇圓

譯者 柴田天馬

發行者 矢部良策

印刷者 小坂孟

發行所 株式會社 創元社
(東京都中央區日本橋小舟町二ノ四)
(大阪市北區橋上町四五)

電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五〇七九九

印刷 大日本・製本 鈴木

萬一落丁・亂丁がありましたら取替へます

序 言

聊齋志異は聊齋によつて志（誌）るされた怪異譚であります。何度読み返しても飽かず面白いので、中國では廣く愛讀され、譯者が見たゞけでも、木版、鉛版、石版等十數種の刊本があります。志異註の著者呂叔清^{ろしゆくせい}は、聊齋志異を讀んで寢食を忘るゝに至つた、と云ひ、「臣に聊齋の癖有り」といふ遊印を刻らせて捺しまくつた程で、それから聊齋癖といふ言葉が生れたのであります。併し志異の愛讀者は中國だけに限られてはゐません。選譯ではありますが、英譯され、獨譯され、露譯され、邦譯されて西と東へ延びて行きました。ケンブリヂ大學の教授ジャイルス博士は志異の面白さをアラビヤナイトに比し、志異の文章を、カーライルだけが並行し得るとさへ云つて居ます。教授も亦聊齋癖の一人でありませう。

聊齋志異は其の名のやうに怪異譚ではありますが、濃艶嬌癡の情話が多く、讀んでゐるうちに、神女、仙女、鬼女、狐女等がいつか愛すべく親しむべき此の世の佳人のやうに思はれてくるのであります、しかも神韻漂渺として濃艶を一層濃艶に、嬌癡を一層嬌癡ならしめてゐるのは、全く著者の大才と妙筆によるのであります。

志異は全十六卷で、中、小篇小説と小話との四百四十五篇を收め、上は王侯から下は乞食に及ぶまで社會各階級の人物を網羅して、老弱、男女、貧富、賢愚、善惡、美醜等が残るところなく全卷中に描寫されて居ります。だから志異を注意して讀めば、一部の中國風俗繪卷を繰り展べるやうに、明末清初の風俗習慣が手に取る如く分るのであります。明末清初は中國文明の復興期で、其の文明を骨髄として今日の中國文化は肉附けられて居るのでありますから、中國を知る上にも、好資料なのであります。

志異を繙く者は、誰れでも、これ程多くの不思議なことを、何うして集めたのだらうと疑ひますが、著者の自志に「人の鬼を談ずるを喜び、聞けば則ち筆に命じ、遂に以て編を成す。之を久うして四方の同人又郵筒を以て相寄す」とあるので見ると、著者が人から聞いて書いたも

のと、諸方の學者たちが提供してくれた材料を書き直したものとを合せて、四百餘篇の怪奇談を集め得たことが窺はれるのであります。材料蒐集の苦心談として次のやうなことも云ひ傳へられて居ます。聊齋は家の前に腰掛けを据ゑて、箴に入れた煙草を具へ、旅行者を見ると呼び止めて、奇怪な話をさせたといふのです。これは、聊齋の自志にある「人の鬼を談ずるを喜び」云々から生れ出た想像説だ、と一笑に付する人もありますが、一笑に付すること自體も亦想像に過ぎません。

郵筒を以て材料を提供した四方の同人は大部分が秀才だつたらうと思はれます。といふのは、志異中の主人公に秀才が多いからであります。

志異の最初の出版者である趙荷村太守の例言中に「此の編の初稿は鬼狐傳と名付けられた。所が鬼と狐は先生の才筆で世間に紹介されるのを恐れ、先生が舉人の試験を受けに試験場に入ると、先生を取り巻いて邪魔をした。で、歸つてから鬼、狐以外の條項を加へて志異と名づけた」といふ一節があります。聊齋は其の試験で落第したので、そんな傳説が生じたのであります。せうが、中國第一の怪奇譚聊齋志異の著者に纏はる傳説としては、興味深いものがあります。

志異に對して其の頃の學者から寄せられた題詩の中で一代の碩學王漁洋の七絶は絶唱と云はれてゐますが、それは「姑らく妄りに之を言ひ妄りに之を聴く、豆棚瓜架雨絲の如し、料るに應さに人間の語を作すを厭ひて、秋憤鬼唱の詩を愛聴するなるべし」といふのであります。前記のやうに聊齋は志異の著に没頭した爲に舉人の試験に及第することができませんでした。併しそれは應試の文章が悪いのではなく、試験官が不正であるか不明であるからだと思つて不平に堪へなかつたやうです。それで自然人間といふものを淺ましく感じ、秋憤鬼唱の詩を聴くことを喜ぶやうになつたのだらうと、王漁洋は推測した譯なのです。志異に目まぐるしくらゐ多くの典故があるのも、落第した自分の學識を世に示して鼎の輕重を問はんとしたのだと評する人があるのも、矢張り同じ様な推測から生れた強い同情なのでせう。併し餘りに典故が多いので、志異は難讀の書だと云はれてゐましたが、呂叔清が三年の歳月を費して「聊齋志異註」を著し、のち本文の末尾に註釋を加へたものが出版されるやうになつて、志異の讀者は俄かに増加したのであります。

本卷には、典故を其の儘用ゐなければ意味の通じないものだけに註釋を加へ、意譯し得る典故

は、直ちに之を意譯して了ひました。讀者の煩を避けたいと思つたからです。

著者は山東省淄川の人で字を留仙、號を柳泉といひ、聊齋は其の齋號であります。明朝の崇禎三年（西曆一六四〇年）の生れで、清朝の順治十五年（西曆一六五八年）十九歳で博士弟子員となり、康熙二十四年（西曆一六八五年）四十六歳で廩膳生に補せられ、翌々年考試を受けて落第しました。康熙五十年（西曆一七二一年）七十二歳で貢生に補せられ、同五十四年（西曆一七二五年）七十六歳で卒しました。聊齋の死年には七十六歳説（胡適其の他）と八十六歳説（魯迅其の他）とありましたが、胡適博士が人を遣つて聊齋の碑文を石摺にさせて考證したので、七十六歳説の正しいことが決定したのであります。

聊齋が何歳で志異を書き始めたかは明らかではありませんが二十歳臺であつたらうと思はれます。そして死ぬまで書き續けたものゝやうです。

本巻を「嫦娥之巻」と名づけたのは、所載二十七篇中正譯の「嫦娥」一篇を加へてあるからであります。正譯といふと何か改まつた感じがしますが、要は原文を殆ど増減せずに、振假名の効果を極度に利用し、できるだけ漢音を避け、直譯と意譯を兼ねた平易な文章にしたものであ

ります。ところが、振假名から本文へ、本文から振假名へ、飛石傳ひが煩はしいと云ふ人もあるので、一應振假名を本文に書き改め已に組版を終つてから之を正譯に較べて見ると、意味は全く同じながら、原文の妙字麗句の代りに當て字などが居坐つて、明珠を瓦礫に換へたやうに思はれるので、再び稿を新にし、再び版を改へて、略ぼ正譯に近いものにしました。其の正譯と異なるところは、總振假名を部分的振假名にしたこと、一字の接續詞や助字などを假名にしたこと、其の他多少の添竄を加へたことであります、そんなわけで、卷名は仍ほ「嫦娥」としておいたのです。

昭和二十六年

柴 田 天 馬

例 言

一 本書各篇の順序は、廣く行はれてゐる趙本（聊齋志異最初の刊行者）の順序とは同じでない。趙本の例言中に「原本は凡そ十六卷であるが、初めは但だ其の尤も雅なるものを選び置めて十二卷としたけれども、刊既に竣つて再び其の餘を閲ると、愛つべくして捨てることが能きぬから、遂に之を續刊した」とある。十二卷までは我が中篇小説短篇小説位のものであるが、十三卷以後になると單章双句に類するものが多く、讀む者に龍頭蛇尾の感を起さしめる憾みがあるから、本書では十三卷以後の各條を十二卷以前の各條中に挿入按配し、大珠小珠玉盤に落つるの觀を爲さしめんと欲した。従つて全面的に順序を變更するにも至つたのである。但し趙本の順序を變更したものは單り本書のみではなく、白話聊齋志異、原本聊齋志異其の他を屈して一掌に餘るほどである。

一 同題異事のもの、○○第二則、○○第三則として、之を一題下に續記するのが趙本の編例であるのに同本第十三卷に雷神の一篇が有つて、第十六卷にも雷神があり、第十四卷に義犬の一題があつて、第十六卷にも義犬が有り、十卷十三卷に三生があり、十三卷十五卷に宅妖があるのは、全く校讎の疎漏と見るべ

きだ。但し原本任和餘集の題詞中、今刻前十二卷は皆其（趙荷村）の手定で、後四卷は則ち之を附存する者だ、とあるから、校讎の疎漏の責は趙太守に歸すべきでない。

一 志異各篇中異史氏曰として著者の短評を項末に附したものがあつたが、多くは舊儒的訓戒に過ぎず、讀後の興味を殺ぐものが鮮^{すな}くないから、一括之を割愛した。

一 原本には間々魯魚の誤りがあつて、從容として入る、客に從つて入る、の如く、判別に苦しむものが少くない。大概是訂正したつもりであるが、若し誤りがあつたら、高教を賜はりたい。

一 本書は原文を増減せぬやうにと心がけ、譯語はなるべく漢音を避け、通俗平易な和訓を以てしたが、餘り露骨に譯し得ぬやうな章句には、特に模糊たらしめた所もある。

一 本書は送り假名の慣例に従はず、一字であるべき送り假名を、二字にした場合もあるし、句讀も無くてもよいところに、施した場合があり、長い傍訓を用ふれば句調の整ふ所を、短い傍訓で我慢した場合もある。是等は、組版に際し、傍訓と傍訓の接觸を避けるため、寔に止むを得なかつたのである。

一 本書の註釋は、半ばを呂湛恩の聊齋志異註に取り、半ばは譯者の註釋である。

聊齋志異

之嫦娥
卷

目次

西湖主

三

妾擊賊

三

輦仙

三

辛十四娘

三

宅妖

三

羅刹海市

三

杜小雷

三

香玉

三

單道士

三

花姑子

三

何仙

三

封三娘

二六

田七郎

二三

韋公子

二四

苗生

二五

上仙

二六

嫦娥

二七

鬼令

二八

伍秋月

二九

董公子

三〇

章阿端

三一

太原獄

三二

臙脂

三三

考弊司

三四

神女

三

姚安

二

續黃梁

三

裝幀梅原龍三郎

聊齋志異

嫦娥之卷

